学生と島－研修旅行引率覚書－

土屋　久

一

法政大学カメラ部と言ったら、長い歴史を誇る学生の課外活動クラブの一つであるのだが、1960年代、そのカメラ部の学生が夏季休暇を利用して離島の撮影旅行に赴いている。

彼らは、何故離島を撮影の対象として選択したのか。その理由を、当該クラブの撮影成果をまとめた『日本の離島』(1)の中で次のように述べる。

私たちが離島に行ったのは、離島を紹介するためでもないし、その美しい風景をめでるために行ったのでもないのです。

私たち八十余名の仲間たちは、電燈もなく、かつては鳥もかよわぬといわれた孤島、都市や工業の発展や繁栄からも忘れられ、一〇年前も、また六五年（1965年のこと−土屋）の現在においても、さして変わらずとり残された海の僻地……、そこにくりひろげられるきびしい生活の姿、日本の現実の姿をこの目でたしかめてみようというところから出発したのです。

私たちは全国に散在する数多くの離島を、経済的・社会的・自然的条件などから考察し、離島なるがゆえにもっている、また生まれてくる問題点を導き出しながら、離島の生活をより深く見つめようと考えました。そして「こういうところで」われら同胞が「こういうふうに」生活し、離島なるがゆえに「こういう悩みや問題」が存在しているという現実を若い瞳で確かめようとこころみたのです（法政大学カメラ部：260）。

この文章から、彼らが離島を訪れた理由は、概ね社会的な関心からであったことが伺われる。高度経済成長のまっただ中にあって、その恩恵から未だ遠い離島の生活や課題を「若い瞳」で見てみたい、そしてそれを第三者にもわかるように表現したいと思ったのではないかと考える。彼らが選んだ島は、北は北海道から南は鹿児島まで、全部で七島になる。

離島の選定や旅の心構えの指導などをおこなった民俗学者の宮本常一（1907-1981）は、学生が島の人びとと深く触れ合い、島人の生活を活写していることを褒めてる。以下にその一部を引いてみたい。

学生諸君の撮影旅行は、八〇人ほどの者が七班にわかれて、七月一日東京をたってそれぞれ目的とする島にへわたり、島民には迷惑をかけないことをモットーにしてキャンプ生活を主とし、日中はできるだけ島民の生活の中にはいり込み友だちになるように心がけ、ほんとうに親しくなってから撮影にとりかかったのだという。したがって彼らの写真には島民のたくまざる姿がよくとらえられている。そのたくまざる姿、かまえざる姿の中に島の生活とはどういうものであるかうかがうことができる（宮本：293-294）。

宮本が指摘するように、『日本の離島』では、写真と文章を組み合わせた、当時としては先駆的な形態で、「若い瞳」が捉えたそれぞれの島の生活・課題が見事に描かれている。しかも学生たちの描き出した島の課題は、現代においても変わらないものであることが多く、今日的な視点からも彼らのまなざしは評価できると考える。

さて、筆者はこの10年程、大学の課外活動の一環として学生を離島の研修旅行に引率している。この旅行の概要については次章でお話しするが、引率の醍醐味は何と言っても、まずは「若い瞳」の感

性に触れることであり、また、彼らの人間的な成長を見ることでもある。

今回、池田雄二先生のご厚意により、演習論文集の紙面を与えられ、この機会に、筆者が学生とともにおこなってきた研修旅行の活動報告を、備忘録乃至偶感録的に記しておきたい。

二

筆者が引率してきたのは、J大学の看護師・保健師を養成する学部の学生で成り立つ離島研究部（以後、離研）と、同大学で国際教養を学ぶ学部学生の課外活動サークルである離島倶楽部（以後、離倶）の二つの部の学生たちである。前者の方が部活動としては先輩格で、部に昇格（2017年度から）する前のサークル時代を含めると、今年で6年目となる（サークル化する前の前史が三年ほどある）。また後者は成立して四年目となる。離倶ができてから、両者は活動をともにすることが多く、異なった学部が交流することによって、お互いに影響を及ぼしあいながら、それぞれ多様なものの見方を取り込むようになってきている。

活動は、J大学が医療系の大学であるために、離島医療の現状と課題を知ることに主軸をおいている。それを夏と春の長期休暇を利用し、実際に離島へ行って、各種の医療・福祉施設や行政の担当機関を回り、関係者との質疑応答や各種交流の中から学んでいる。その際、単に離島医療に関心を寄せるだけでなく、島の生活と文化を理解するために、各島の主な生業を体験するカリキュラムを必ず盛り込み、島の方々との交流をおこなうように努めている。

ここ6年間の研修先離島は以下の通りである。

2013年度　八丈島（夏）　瀬戸内海の島々（豊島⑵・犬島）（春）
2014年度　八丈島（夏）　対馬島（春）

2015年度　八丈島（夏）　トカラ列島（諏訪之瀬島・宝島）（春）
2016年度　八丈島・青ヶ島（夏）　瀬戸内海の島々（小豆島・豊島・小豊島・長島）（春）
2017年度　八丈島・八丈小島・青ヶ島（夏）　与那国島（春）
2018年度　八丈島・青ヶ島・三宅島（夏予定）　トカラ列島（小宝島・平島）（春予定）

毎夏、伊豆諸島南部地域、取り分け八丈島が研修先となっているのは、筆者がここ20年ほど主に民俗調査に入っている地域であり、私たちの研修に協力してくださる島の方々も多く、また、各種医療機関の充実や東京本土からの交通の便を考慮に入れると、島旅初心者の学生を引率するのには最適の離島と考えられるためである。しかしながら、毎年同じ地を訪れているのであるから、学年が上にいくにつれて、当然、二度目、三度目の八丈島研修となる学生もいるわけである。こうした学生においては、同じ地を繰り返し訪れることで、地域に対する洞察が深まるとともに、島の方との繋がりも強くなり、研修がより実りあるものになるという効果があるように見受けられる。

2015年度から八丈島での研修は、島の方から一軒家を借り受けて、自炊による合宿の形を取るようになった。自炊の形にしたことで、合宿場所に島の方々が集まりやすくなり、その結果、交流も増えて、学生も多様な方々からの刺激を受けることができるようになった。

2016年度には、夏の研修に八丈島の南約70㎞に位置する青ヶ島が組み込まれるようになった。そして、2017年度、青ヶ島教育委員会から、教育ボランティアへの参加のお声がけをいただき、青ヶ島小中学校の生徒との交流も始まった。また、同年、1969年から無人島となっている八丈小島を訪れた。この島の無人島化には、様々な要因があり、その中で医療の問題も大きく関わっているとされる。こ

の島に実際に渡ることで、そのことを実感として学生は学ぶことができ、改めて生活の中に医療が占める重要性を認識した。

春の研修は、夏の研修とは反対に、毎年異なった島を訪れるように計画している。様々な島を訪れることで、島の多様性を理解し、知見を広めるためである。4年間の学生生活を通じて、外海離島と内海離島の両者を経験できるように配慮している。

夏・春の研修旅行にあたっては、事前学習と事後のレポートの作成をおこない、2015年度よりは、レポートの発表会を、準公開形式でおこなっている。

その他、離研が部に昇格したのを機会に、同部が所属する学部主催の学園祭に参加することとなり、「島と風土病」というテーマのもとに3本の映画の上映会をおこなった。また、2017年度からは、離研・離倶ともに、毎年11月に池袋のサンシャインシティで開催される島の祭典であるアイランダー(3)に本格的に参加し、学生が各離島ブースに入り手伝いをおこなうようになった(4)。

また、2015年度より、学生有志が、主に首都圏でおこなわれる各離島のイベントに加わり、ボランティや有償でその手伝いをするようになってきている。

三

ところで、私たちは島を研修先としているわけだが、そもそも島とはいったいどのような地域・場所のことをいうのであろうか。

1994年に発効し、日本は1996年に批准した「海洋法に関する国際連合条約」（国連海洋法条約）では、「島とは、自然に形成された陸地であって、水に囲まれ、高潮時においても水面上にあるものをいう」としている。しかし、この基準で島数を数えると、日本の場合、その数は膨大なものとなってしまうため、一般に日本の島数を数える際は、海上保安庁が『昭和62年版海上保安庁の現況』におい

て発表した基準が用いられている。その同庁の基準は、関係する最大縮尺海図と2.5万分の1陸図を用いて①周囲が0.1km以上のもの、②何らかの形で本土とつながっている島について、それが橋、防波堤のような細い構造物でつながっている場合は島とし、それより広くつながっていて本土と一体化しているようなものは除外し、③埋立地は除外、となっている(公益財団法人日本離島センター2004:124)。この基準でカウントすると、日本の島数は6852島となる。6852という数字には、当然、無人島も含まれており、それを除いた有人島で架橋などがされていない離島の数は、約420島である。そして、無人島をも含めたこうした島々が、国土面積の12倍にも及ぶ排他的経済水域を確保し日本という国に広がりと多様性、可能性をもたらしているという現状がある(公益財団法人日本離島センター2013:2-4)。国土が狭いと表現される日本ではあるが、排他的経済水域は世界第六位（数え方により若干の上下あり）となり（同上）、島を視野に入れてみることにより、日本の見え方が大きく変わることに驚く人も多いのではないであろうか。

さて、ここまで、主に島の法的乃至は社会的な意義について主にまとめてきたわけであるが、ではどうして人は、この島といわれる地域・場所に惹き付けられ、行ってみたいと思うのであろうか。先の法政大学カメラ部の学生に引きつけて言うならば、彼らは社会的な課題から島に関心をもったようであることは先に指摘した通りである。しかしながら、当時、島と同様な課題をもった場所は、中山間地域などにも多かったはずである。それを、敢えて島に行って写真を撮ってみたい、と思わせる「何か」が島にはあるはずだと思うのである。

次章、この「何か」について少し考えておきたい。

四

フランス文学・美術史の研究家で、島に関する著作も多い岡谷公二（1929-　）は、「孤立していると同時に、周囲が明確に限定され、そして狭いことが、島の本質である」（岡谷：8）とした上で、「島は、独自の顔を持つひとつの国、と私の眼には映った」（同上）、と述べている。ここで岡谷は、島を「ひとつの国」としているのだが、筆者の知人・友人にも、島に行くと外国を訪れた時と同じ感じがする、と言う者が少なからずいる。島は周囲を海に囲まれているので、当然のことであるが、訪れるには船か飛行機で行くしかなく、島に着くと突然異文化が立ち現れてくる感じがするのであろう。そこが、陸続きの場所への移動と違い、外国に行ったときと同様の感覚となるのだと推察される。

恐らくこの岡谷の考えを踏まえて、島の百科事典ともいうべき『SHIMADASU』のあとがきは、島の本質と価値を高らかにうたい上げている。以下に引いてみたい。

島は、ひとつひとつが独自の時間と空間をもつ独立した国。海によって明確に一線を画されているため、出会いと別れが極だち、嬉しさや哀しさ、なつかしさや切なさ、といった感情がより深く、ひときわ強く実感できる場所なのです。

また島は、豊饒の海、田や野山とともに生きる人々の住まう地。まさに大自然の最前線にあって、自然の営みと共存する知恵や価値観など、独自の精神文化をつくりあげてきた個性豊かな共同の大地です。だからこそ島は、私たちがなにかしら忘れかけている《大切なもの》に気づきを与えてくれる場でもあります。この島の国に住む人すべてにとって、島はまさに共有の財産といっていいでしょう（日本離島センター2004:1327）。

このあとがきで言われるように、島は、私たちが普段あまり意識しないさまざまな感情に働きかけ、それを喚起する「場」であるのであろう。しかも「独自の精神文化」を把持してもいる。したがって、各人それぞれに、さまざまな気づきを与えてくれる「場」にもなると思われる。これが、人が島に惹き付けられる大きな要因であるといえるのではないか。しかも、日本には、こうした「場」が、有人島に限るとしても420ヶ所もあるのである。多少大げさにいうことを許してもらえるならば、島への旅は、400をも超える多様な「個性」と触れあう機会を私たちに提供してくれている。

特に学生にとっては、その触れ合いは、若い冒険心を刺激するであろうし、とかく抽象的になりがちな大学での勉学が、島という個別的・具体的なフィールドと関わることにより、色彩豊かなものになるとも思われる。法政大学カメラ部の学生が離島を訪れようと思った深層には、彼らは自覚していなかったかもしれないが、上述した島の磁場の働きがあったと考えられる。

先の『日本の離島』の最後に載せられた「私たちの反省と学んだこと」の項目で、彼らは、「私たち自身に新しいものをつけ加えることができた」（267）「島の生活は私たちの心に何か豊かなものを与えてくれました」（269）と書いている。彼らは、「島の生活」を単なるカメラの被写体として捉えたのではなく、それと深く触れ合うことによって、彼ら自身が成長し、また彼らはそれを敏感に感じ取ったのだと思う。

翻って筆者らの研修旅行を考えるに、法政大学カメラ部の学生ほどの触れ合いが、島の方々と果たしてできているのか、深く反省せねばならないが、島に引率した学生の多くが、人間的な成長を遂げていることは間違いない。そして、その中には島のもつ魅力の虜になる学生もいる。本年（2018年）春に、与那国島に引率した学生の一人は、「研修で島を訪れる度に島の良さを知り、ますます島への憧れが強くなっている」とレポートの最後に書いている。島に「嵌

る」学生が出てくれるのは嬉しい限りであるが、同時に強い責任を感じるのも事実である。学生の成長のために（また言うまでもないないが、島の方々への恩返しのためにも）、実りのある創造性豊かな研修を、今後一層工夫していかねばならないと考えている。とはいえ、取り立てて筆者がなにかをするまでもなく、島という場がなんとなくそのことを可能としてくれてしまうのが、不思議である。

註

(1)　宮本常一監修、法政大学カメラ部編『日本の離島』、昭和40年6月20日に角川写真文庫として発刊。

(2)　瀬戸内海に「豊島」と表記する島は愛媛県と香川県の二箇所にあるが、ここでいう豊島は香川県の方である。2016年度も同。

(3)　アイランダーとは、毎年11月に池袋のサンシャインシティーでおこなわれる島々の祭典。2017年度は、全国の離島200島が参加。島への移住・定住の相談や島のピーアールなどをおこなう。国土交通省・公益財団法人日本離島センター主催。

(4)　小原佐和子「離島留学や村営塾など新しい取り組みにチャレンジする島々　『アイランダー2017』開催」『しま』252号（2018年1月刊行、公益財団法人日本離島センター発行）に紹介される。　参加ブースは、八丈島、青ヶ島、トカラ列島、大崎上島、豊島（香川県）、愛知県の島々（佐久島、日間賀島、篠島）の各島。

　尚、アイランダーへの学生のボランティア参加は、離研・離倶がつくられる前からおこなわれている。

参考文献

岡谷公二　1981『島の精神誌』思索社

公益財団法人日本離島センター　2004『SHIMADAS』

2013『島々の日本』

田村善次郎　1986「解説」『宮本常一著作集35』未来社

法政大学カメラ部編　1965『日本の離島』角川書店
宮本常一　1965「日本の島々」同上所収

謝辞：此の度、筆者らの研修旅行の記録に貴重な紙面を割いて下さいました池田雄二准教授には心よりの感謝を述べさせていただきます。有り難う御座いました。池田先生には、私たちの研修にあたり、数々のご助言もいただいております。この点に関しましても厚く御礼申し上げます。